



日本支部ニュースレター

(第1号)

発行元: S I D日本支部
発行責任者: 谷 千束
発行日: 1995年5月15日

日本支部活動関連

S I D日本支部ニュースレター発刊に寄せて 支部長 谷 千束 (NEC)

会員の皆様には初めてのご挨拶となりますが、日頃のS I D活動へのご協力に感謝申し上げます。さて、本S I D日本支部ニュースレターですが、3月に試行的に1枚の同名資料を皆様へお送りし、関係各位のご意見を伺ったところ好評のようでしたので、内容を拡充した形で今後定期的に会員の皆様にお届けすることとなりました。



S I D日本支部は、他の国内学会と異なり、米国に本部がある国際学会の組織の一部門であるため、会員の方々には学会全体の活動、組織の仕組みなど解りにくい面もあるかと思われます。S I D日本支部ニュースレターは、支部内のニュースはもとより、本部やアジア地域の動きなどの情報を皆様にお伝えすると共に、ディスプレイに関する有益な情報や関連分野の第一人者の方々のエッセーなども掲載して、会員の皆様方のお役に立つことを目的としていきたいと考えております。これに懸かる費用、工数は出来るだけエコノミーにするため、取り合えず1回4頁、年3回程度の発行の予定です。編集委員には、茨木さん(東芝)、高原さん(富士通研)に就任して頂きました。

初回の本誌では、鈴木先生(アジア担当副会長、奈良高専)にアジア地域の活動状況のご紹介、大石先生(東京工芸大)には第4代支部長当時のご紹介(シリーズ予定)、そしてトピックスコーナーでは小林先生(農工大)にLCD、内池先生(広島大)にPDPに関するエッセーをお願い致しました。次号以降も面白い企画を検討しておりますが、皆様の方からもご提案、ご意見がございましたらぜひお聞かせ頂きますようお願い申し上げます。

庶務幹事からのお知らせ

SID日本支部では、年間10回程度の研究会を主催、共催しています。そのつど会員の皆様に葉書でお知らせしますので、多くの会員の皆様のご参加をお願いいたします。なお、今後の研究会開催予定は次の通りです。

- 1) 7月5日 SID'95 報告会(シャープ 東京本社(東京・市ヶ谷))
- 2) 7月20日 ディスプレイの材料・部品及び周辺技術(機械振興会館(東京・芝公園))
- 3) 8月24、25日 AMLCD'95(大阪国際交流センタ(大阪・天王寺))
- 4) 10月16～18日 アジアディスプレイ'95(アクト・シティ(静岡・浜松))
- 5) 10月23、24日 ASID'95(韓国、ソウル)
- 6) 12月 アジアディスプレイ'95 報告会

7月4日(火)には日本支部評議委員会を開催いたします。

日本支部庶務幹事・長江慶治(日立・日立研)

会計幹事からのお知らせ

関 昌彦 (NHK)

TEL 03-5494-2253/FAX 03-5494-2256

☆4月21日現在の会員の更新状況をお知らせします。

更新手続き者: 189名(内2名学生)

新規入会者: 11名

まだ、更新手続きを行っていない方は、ぜひ手続きをお願い致します。

☆S I D日本支部専用の振込用紙を使用しないで振り込む場合は、個人名で振込をお願いします。また、振込者の連絡先等のメモを会計幹事までご送付ください。会社名で振込まれますと、振込者(会員名)が判らない場合があります。会社の経理から支払われる場合は、経理担当者に個人名およびメモ送付の件をお知らせください。S I D専用の振込用紙が必要な方は会計幹事までご連絡ください。

S I D本部、欧米、アジア活動関連

S I Dのアジア地域活動紹介

SID Regional Vice-president of Asia

奈良高専 鈴木 忠二

S I D日本支部会員の皆さんにとって最も知らされていない[S I Dアジア地区担当副会長の仕事]は何なのか。以下簡単に紹介しましょう。この制度ができて3年が過ぎようとしています。会則第5条「役員」のところに、S I D地区担当副会長のことが書かれています。すなわち、北・中・南米国地区担当、ヨーロッパ地区担当とアジア地区担当の3人の副会長が選出されています。仕事は①S I D会員を増やす運動、②新支部をつくる運動、③その他 その地域の支部活動が相互に円滑な活動ができるように本部役員を代表して支援することなどが義務づけられています。アジア地区の初代副会長は小林先生(東京農工大)でした。その後を受けて私が勤めて1年が過ぎようとしています。この職の任期は1年で2期までは続けられる規定になっています。1年に3～4回開催される本部役員会・Executive Committee MeetingおよびBoard of Directors Meetingに出席し、S I Dの活動が円滑に運営されるよう諸問題を議論し、新・改善案を会議にかけ、決議・実行に移す作業を行っています。その他、アジア地区担当副会長の仕事として、4支部(日本支部、韓国支部、台湾支部と北京支部)が共催する国際会議(A S I D)やIDRC(アジアではAsia Display'〇〇のニックネーム)アジア地区開催に関する問題を解決し、本部の理解を取り付けることや報告をする仕事がある。そのため、日本支部役員の方々にご援助頂くことが多い。

昨年6月からのアジア地区活動について簡単に紹介しましょう。

- (1) 前任者の小林先生のご努力でアジア地区に四番目の支部、すなわち北京支部が1994年6月に誕生しました。会員18名で発足しました。
- (2) 1994年10月には浜松でIDW '94と2nd A S I Dが開催されました。特に、A S I Dに関しては次年度開催国をどこにするか、決める必要があり、この時にアジア地区の役員会を開催しました。その結果、1995年10月23日～24日に韓国ソウル市で開催することを決めました。また、同時にアジア地区役員会を開催し1996年A S I Dの開催地を決めようとしています。さらに、1998年のIDRCアジア地区開催国をどこにするか、各支部から開催計画案を1995年2月末までに副会長宛提出するよう決めました。
- (3) 1995年1月末に開催された本部役員会で(2)の内容は承認され、実行に移っています。1995年5月の役員会で私より中間報告することになっています。
- (4) 会員数の拡大運動について各支部にお願いしており、日本支部では伸び悩み状態にあります。私からも会員増のご協力をお願い致します。現在、韓国支部や台湾支部は倍増の勢い状態にあります。また、日本の維持会員数が8社と少なく、副支部長の仕事として維持会員数増大運動を展開していますので、ご協力をお願いします。もちろん、アジア地区の他支部にも依頼する予定です。
- (5) AM-LCD国際会議について、日本支部にS I Dの仕事をして頂いており、S I D役員会では小林先生(東京農工大)に計画をお任せしています。日本支部の皆さんのご協力をお願い致します。
- (6) 1995年1月末の役員会で、アジア地区で開催されるS I Dが関係する国際会議の論文集を最低20部を本部事務所へ有償で送ることが決定されました。実行担当に私が指名されましたのでお知らせします。
- (7) 1995年役員会で"Display of the Year"および"Display Product of the Year"の二つの賞がSID Information Display Magazineに設けられます。計画担当に小林先生が任命されました。
- (8) S I Dのロゴマークが新しくなります。カラー化の時代にマッチした各種のロゴが使えるようになります。
- (9) S I D新会員申込み用紙がカラー化され新しくなります。5月23日～25日のS I Dシンポジウムから使用されます。その時、英文申込用紙の他に日本語の申込用紙にも記入して頂くようになっていますので、会員以外の方々にお知らせ下さい。

今後、S I Dのアジア地区紹介を度々させて頂く予定をしています。役員会報告は日本代表の岩本さん(東芝)と相談しながら、重複しないように致したいと思います。S I D会員の皆さんのご協力を重ねてお願い致します。

Asia Display '95

会期：1995年10月16日(月)～18日(水)

於：アクロシティ浜松(JR浜松駅前)

●論文投稿締切：1995年5月17日 ●Post-Deadline Papers 投稿締切：1995年9月11日

論文投稿及び問い合わせ先：東京都港区南青山2-6-12 アヌシー青山2階(〒107)

(株) ザ・コンベンション内 「Asia Display '95」事務局

Tel:03-3423-4180

Fax:03-3423-4108

トピックス

私のLCD研究事始め/何故、どの様に始めた

東京農工大学 工学部電子情報工学科

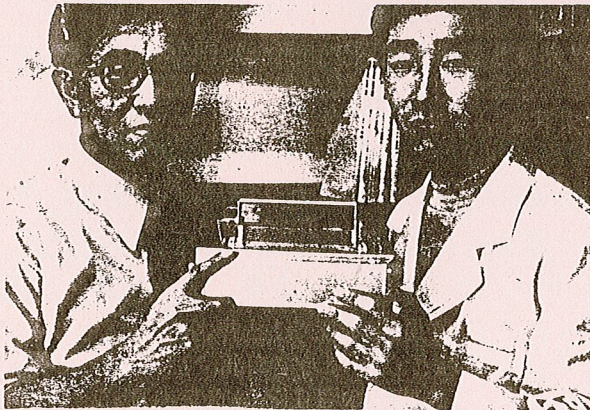
小林 駿介

LCD技術が顔を出したlate60はどんな時代だったのでしょうか？1964年3月東大大学院修了時、電子工学専攻の博士課程修了者一同コメントを求められた。私は「いずれなにか新しい研究を始めます」と言った。その時、光コンピューターを頭に浮かべていた。私にとって当時のヒーローは「パラメトロン電算機」の後藤英一先生および霜田光一先生による「メーザーによる相対論の検証」だった。後藤先生がフェライトなら私は光だと言うわけだ。

理研の霜田先生の研究室にお世話になり赤外線レーザーと半導体赤外線検出器の研究を始めた。

1967年のある日、レーザーのパルス発振の電算機計算をしていた。計算速度が遅く時間を持て余していた。そこで理研の計算機室（高橋・後藤研）の相馬さんに「後藤先生は今何をしていますか？」と尋ねた、答えは「高精度のCRT」だった。私は雷に打たれた！そうかディスプレイもあるんだと。その頃、霜田先生の代理で（株）日本電子のレーザー研究を手伝っていた。そして赤外線サーモグラフィの事業化に着手成功を見ていた。一方、コレステリック液晶を使えばとても安価にサーモグラフィが可能であることが分かり、液晶というのがあることを知った。さらに、1968年の秋、吉原経太郎さん（現分子研）が「小林さん、IBMの江崎さん（現筑波大学大学長）が日本に来ておられる、会いに行かないか」と誘われた。お会いすると「液晶というもので壁掛けテレビの研究をRCAでやっている」と江崎さんが言われた。「うーん、私がやろうとしている新しいことは液晶ディスプレイだ」と決心することになった。

赤外線ホログラフィ、DSM-LCDと無欠陥マルチカラーのTN-LCDの研究に着手して、IEEE Conf. on Display Devices (1970)とSID Symp. (1972, 1973)で発表した。当時米国のILIXCOのTN-LCDのサンプルも欠陥が多く使いものにならなかった。無欠陥のTN-LCDはラビング処理でプレティルトの制御とね



じれ角を90°以下にすることでdisclinationの発生を抑えることが出来た。無欠陥のTN-LCDの研究は武内文雄さん（東芝）と始めたものであるが、始めるとすぐ武内さんが「先生、気持ち悪い虫が液晶から出て来ました」と気味悪がっていた。これがリバースティルトディスクリネーションだった。この様にして気分は光コンピューターから低消費電力のディスプレイへと完全に移ってしまった。時代として面白いのはLCD, C-MOS, 半導体メモリーが1973年に立ち上がった事です。写真は1972年秋 無欠陥TN-LCD 武内文雄さんと。

（参考文献：小林駿介、応用物理61、388(1992)；小林駿介編著 液晶 日刊工業新聞(1970)）

トピックス

プラズマディスプレイ技術討論会

主査 内池 平 樹

プラズマディスプレイ技術討論会は、1991年10月頃、上西勝三、河村達郎、小島健博、谷千束、内池平樹が集まり、プラズマディスプレイの開発を盛んにするために、情報交換の場が必要であるとの認識から、どの学会や団体にも従属しない会として発足した。第1回が開催されたのは翌年4月1日で、ちょうどエープリルフールでもあり、この会の開催が冗談であると考えて出席する人数が少ないのではと心配した。30～40名の参加者があれば良いのだがと話し合ったことを記憶している。当日は、予想に反して100名を越える方々に参加していただき委員一同感激した。第1回が発足のご祝儀参加ではないかと心配していたが、回を追う毎に参加者が増え続けて、さる4月4日に開催した第10回の懇談会では280名を越える参加者があり、臨時の椅子も間に合わないほどの盛会となった。この間、ジャパンディスプレイ'92開催後に、神戸国際会議場で国際ワークショップ規模の討論会を開催し、また、昨年10月のIDW'94にも主要構成団体として参加した実績を持っていて、この会の実力もかなり強くなってきたのではと実感している。

これまで9回の開催で、プラズマディスプレイの製造の基礎技術から動作原理まで幅広い話題を提供してきた。第10回からは、これまで討論してきたテーマを大量生産技術に向かった先進的な製造技術と結びつけて展開する段階に到達している。

われわれのプラズマディスプレイ技術討論会は、この3年間の活動の間に富士通と三菱電機からの対角21および20インチのカラープラズマディスプレイの市販開始、NHK放送技術研究所とNECによる対角40インチのカラープラズマディスプレイの実演に少なからず貢献してきたと自負している。その結果、大画面フラットパネルディスプレイを実用化するのは、プラズマディスプレイ以外には考えられないことを多くの方々に理解していただけるようになった。今後、カラープラズマディスプレイ及びその要素技術の開発に強く関心を持っていただける企業がますます多くなることを期待している。

あの頃の日本支部 (シリーズ①)

日本で初めてのディスプレイ国際会議 (Japan Display '83) 準備世話人の会

もうそろそろ15年も昔の話になるので、記憶もあやふやになっており、大ざっぱな思い出ぐらいしか書けそうにありません。精度の悪いところはお勘弁願います。私が日本支部の支部長を勤めたのは、1980年6月から1982年5月までの2年間でしたが、その間で思い出されるのは、何と云っても日本で初めてS I D関係のディスプレイ国際会議を開くというので、そのお膳立て・運営組織づくりの準備を行なったことです。

当時、わが国の情報ディスプレイ分野の生産と研究開発の進展は目ざましいものがあり、S I D関係の国際会議への日本からの発表・参加も、その数年前からうなぎ昇りに伸びていた時期であったと思います。このようなことから、1975年に日本支部が設立されて以来、日本でも国際会議をやったかどうかという非公式な打診が何度かあったと聞いていましたが、1980年春のS I D総会の席上で公式に話題となり、いよいよ真剣に具体化の可能性検討を迫られる状況になりました。

一方、それまでS I Dでは、毎年春の国際シンポジウムのほか、米国内で1年おきの秋、Biennial Display Research Conferenceを開催しており、1980年秋にはCherry Hillで開かれることになっておりましたが、翌1981年秋にはヨーロッパ(München)でS I Dと西ドイツのNTZとの共催の形で開催されることが決まっていました。S I D本部では、日本での国際会議をこの動きとリンクして、1983年秋に開くことにし、これまでのBiennial Conferenceを発展的に継承する形で、ヨーロッパ、米国、日本で3年周期の持ち回りで毎秋開くことにしてはどうかとのアイディアがあり、その方向で検討することの示唆があったと記憶しております。

いずれにしてもこうしたS I D本部の意向を受けて、日本支部では1980年7月の支部総会を皮切りに評議員会などで議論を重ね、12月の支部評議員会で最終的に前向きに受け止め、具体的に準備を進めることで全員の賛同を得るに至りました。早速に当時の支部役員、評議員を中心に国際会議準備世話人会を組織し、1981年1月19日を第1回とし、5月20日の第4回まで開催日、会場、予算原案、組織原案、主催団体、業務委託などについて具体的調査と検討を行ない、基本原案をまとめました。

主催はS I Dと日本のテレビジョン学会との共催とすることで、テレビジョン学会の役員会で内諾を得、同年4月27日にNew Yorkで開かれたS I D本部のBoard of Director Meeting(宮地先生、芦川氏出席)で了承されました。この時、同年秋Münchenで開催予定のEurodisplay'81を第1回とし、ヨーロッパ、米国、日本の順でS I Dと各当番国学会との共催の形でIDRC(International Display Research Conference)を開くことが正式に決まり、今日に至っているわけです。

予算原案は、参加者数を300名として作りました。これは、1980年のCherry Hillが約300名であったことなどが根拠でしたが、テレビジョン学会との借入金や同意書の折衝では財務に対する不安の声がありました。実際は832名(海外238名)と大幅な+方向の見込み違いだったわけで、その後のディスプレイ分野の進展、広がりや日本の活発な情報発信力を考えれば当然の帰結であったと思いますが、当時はまだなかなかそこまで一般に理解されなかったのです。(大石 巖)

編集後記

3月半ばに支部ニュースの話がもちあがり、さっそく、第1回の編集委員会を開いて(4月5日)、第1号発行日を5月15日に決定しました。その後、スタイルを決め、名前も小林先生のアドバイスをいただき「日本支部ニュースレター」としました。さらに、第1号の記事と執筆者の方々へのお願いなど、あわただしい中、無事発刊にまでこぎつけることが出来ました。これから、益々魅力あるニュースレターに育てていきたい、S I D会員の皆様のご支援・御協力をお願いします。(茨木 伸樹)

編集委員

茨木 伸樹 (東芝) Tel 045(770)3208/Fax 045(770)3188
 高原 和博 (富士通) Tel 0462(48)3111/Fax 0462(48)5192